

古典に親しむ態度を育てる指導法 ～「おくのほそ道」の実践をとおして～

1 設定理由

生徒たちは古典作品を読むことは、難しく抵抗があり、自分との隔たりがあると感じている。古典を読むことは、伝統や文化を身近に感じ、古人の生き方に触れることができ、自分が現代に生きるものの意味や価値についての考えを深めさせるきっかけとなるであろう。

ここでは、まず「古典が読める」・「古典がわかる」という達成感を味わわせるために、音読や視写などの取り組みやすい学習から、意味や内容を理解するような思考する学習へと進めていきたい。また、自分というフィルターを通して、歴史的な背景や作者の思いを想像しながら読むことで、古典作品を身近に感じ、古典に親しませようと考え、本単元を設定した。

2 研究仮説

<仮説1>

原文音読、原文視写、語句の意味の確認、口語訳、暗誦、問題演習、感想という学習過程を繰り返すことで、「古典が読める」、「古典がわかる」という達成感を味わわせることで、古典に親しむことができるであろう。

<仮説2>

生徒一人ひとりが考える「おくのほそ道の魅力は何か」という表現活動（プレゼンテーション、課題作文）を通して、現代に通じる人間の生き方や自分の考えを広げることにより、古典を身近に感じ、古典に親しむことができるであろう。

3 研究内容

- (1) 原文音読、原文視写、語句の意味の確認、口語訳、暗誦、問題演習、感想という学習過程を繰り返すことにより、「古典が読める」・「古典がわかる」と達成感を味わわせる指導方法の工夫。
- (2) 「おくのほそ道の魅力とは何か」という学習課題に対する表現活動を行い、古典の世界に親しませる指導方法の工夫。

4 結論

「原文音読、原文視写、語句の意味の確認、口語訳、暗誦、問題演習、感想」という学習過程を繰り返す中で、生徒が次に何をやればよいのかを明確に理解し、主体的に学習に参加することができた。また、生徒同士での教え合いの中で相互理解が深まり、真剣にそして楽しく学習ができた。

表現活動（プレゼンテーション、課題作文）へ発展させたことによって、作品の内容を細かく振り返ろうとする姿が見られた。音読と現代語訳、内容理解の学習だけで終わらせるのではなく、表現活動（プレゼンテーション、課題作文）へ広げるが、作品や作者の文学観・人生観により深く迫るために有効であると考えられる。また、生徒相互が交流することにより、自分では気がつくことがなかったことや理解を更に深めることができたのではないかと考えられる。